

大学生の友人への相談行動意図を規定する要因 — 愛着スタイルによる差異の検討 —

鈴木 捺南子・清水 裕

Factors stipulating the consultation action intention in friends of undergraduates: Differences according to attachment style

Nanako SUZUKI and Yutaka SHIMIZU

Factors influencing consultation action intention of university students was investigated according to the type of attachment style: secure, dismissing, preoccupied, or fearful. University students ($N=240$) participated in this study by responding to a questionnaire survey. We devised a hypothetical model of factors prescribing consultation action intention and examined its validity by using multiple-group path analysis. The hypotheses predicted the following: (1) A route leading to consultation action intention from Secure and Fear attachment styles via the recognition of consultation benefits; (2) A direct path from Independence to consultation action intention in secure and dismissing attachment styles in which anxiety disappointing is low; (3) A direct path to consultation action intention from psychological distance of secure and preoccupied types attachment styles, in which intimacy avoidance is low. Results supported Hypothesis 1, however, Hypotheses 2 and 3 were not supported. It is concluded that factors prescribing consultation action intention differ for different attachment styles, and approaches for promoting consultation action intentions are different for each attachment style.

Key words : *consultation action intention* (相談行動意図), *attachment style* (愛着スタイル)
university students (大学生)

問題と目的

青年における不適応の実態

文部科学省が実施した学校基本調査(速報値)(文部科学省, 2015)によると、長期欠席者数(年間30日以上欠席者)のうち、「不登校」を理由とする児童生徒は12万3千人存在しており、大学生に関して全国規模の調査を実施した、水田・小林・石谷・安住・井出・谷口(2009; 2010)は、0.7~2.9%の大学生(全国の大学生約280万人中2~8.1万人)が「不登校」と推定している。また、内閣府が実施した若者のひきこもりに関する実態調査(内閣府, 2010)によると、現在ひきこもり状態にある子どもがいる世帯は、全国で約26万世帯と推測され、15~24歳の青年が約半分を占めることが報告されている。この調査の中で、悩み

を相談する相手は、一般群においては「友人・知人」が65.4%、「誰にも相談しない」が11.6%であるのに対し、ひきこもり群においては「友人・知人」が37.3%、「誰にも相談しない」が27.1%と、誰にも相談しない割合が多かった。これらのことから、悩みを誰にも相談できないことは、青年期の若者が社会の中で不適応に陥る要因の一つと考えられる。平成25年度に内閣府が行った『我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』(内閣府, 2014)でも、悩みを持った場合に「誰にも相談しない」と答えた13~23歳の青年の割合は、15.7%にのぼると報告されている。

河村(2004)は、相談相手のいない短期大学生が自己の死を考えるほどの精神的危機に至りやすいと指摘しており、永井・新井(2008)は、一人では抱えきれない悩みに直面した場合、必要に応

じて適切な援助を求めることは、適応上重要であると述べている。これらのことから、悩みをもつ青年の相談行動を促進させるために、相談行動を規定する要因を明らかにする必要があると考えられる。

青年の相談相手

青年期は「家庭」と徐々に距離を置き、「友人」にウェイトを置いていく時期(宮下・森崎, 2004)とされている。「友人」が大きな心の支えになる理由として、落合・佐藤(1996)は、青年が心理的離乳の途上にあり、親や教師には頼りたくないという気持ちをもちながら、自分にも自信が持てない心理状態にあるためと述べている。

高校生を対象として相談に関する意識を調査した、中溝・板橋・芳賀・足立・飯野・田中・松木・吉田(2000)は、最も身近な相談相手が「友人」であることを示し、大学生を対象に調査した、牧野(2014)も、悩みの相談相手は友人が圧倒的に多いことを示している。したがって、青年期に適応的な生活を送るためには友人に悩みを相談できることが必要と考えられる。

しかし、NHK放送文化研究所による中学生・高校生の生活と意識調査(NHK放送文化研究所, 2013)では、1992年以降は悩みごとの相談相手としての「友人」の割合が減少傾向にあるのに対し、「お母さん」の割合が増加している実態が報告されている。さらに、いま関心があることについて、「友だちづきあい」が2002年に比べ減少している。これらの結果から、友人に悩みを相談できることは適応的と考えられる一方、青年の友人関係は変化し、友人に悩みを相談する機会が減りつつあるといえる。

大学生の相談行動

永井・新井(2005)は、相談行動を援助要請行動の一形態といえるとしている。援助要請行動は、「自力だけでは解決できない問題に直面した個人が、問題を解決しようと他者に援助を求めること」(相川, 1989)と定義されている。そこで本研究でも永井・新井(2005, 2007, 2008)と同様に、相談行動を援助要請行動の観点から捉えていくこととする。

野崎・石井(2004)は、援助要請抑制要因に基

づいて大学生の援助要請行動を分類し、「問題の重大性」「自尊心への脅威」「心理的負債感」の3つの行動特性に基づいて5つの行動類型に分類されることを明らかにした。その中で学業的援助要請は、それほど重大性の高くない日常的な援助要請行動として位置づけられる一方、情緒的問題解決のために援助を求める行為は、その他の援助要請行動とは本質的に異なるとしている。

また、友人への援助要請の方法と適応との関連について検討している渡部・永井・桑原(2014)によれば、直接会って援助要請する者において友人関係満足度が高いことが示された一方で、直接・間接ともに用いない者は直接援助要請を用いる群に比べて友人関係満足度が低いことが示された。このことから、大学生において友人に援助要請できる者は、できない者に比べて適応的と考えられる。

愛着スタイル

本研究では、大学生の友人への相談行動を規定する要因として愛着スタイル(attachment style)に注目する。

Bowlby(1969)は、愛着理論の中で「内的作業モデル(Internal Working Model: 以下IWMと記す)」という概念を提唱している。粕谷・菅原(2001)によれば、IWMとは、他者と自己の関係について個人が持つ認知的枠組みであり、各個人はこれらのモデルを現実世界のシミュレーションモデルとして使用することにより外界からの情報を処理し、生活上のさまざまな出来事を認知したり、安全感を得るのに有効な自分の行動のプランを作成したりするとされている。また、永田・緒賀(2010)は、乳幼児期からの愛着対象との様々な出来事や経験を通して形成されたIWMは、愛着対象以外の他者へと般化されていくものであり、対人関係研究において、IWMは重要な要因の一つであると考えている。

IWMとは、自己と他者の有効性に関する主観的な表象(丹羽, 2002)であり、Bartholomew & Horowitz(1991)は、自己や他者への確信がポジティブかネガティブかにより成人の愛着スタイルを分類する新しい枠組みである、2次元4分類モデルを提案し、その尺度として関係尺度(Relationship Questionnaire: 以下、RQと記す)を開発した。

そして、中尾・加藤 (2004) は、このRQが2次元4分類の愛着スタイル尺度として妥当性があり、十分に使用可能であると、一般他者を想定した成人愛着スタイル尺度 (Experiences in Close Relationships inventory) の日本語版を作成して、その信頼性と妥当性を検討した。中尾・加藤 (2004) によると、この2次元4分類モデルにおける自己観は「自尊感情の維持を他者からの受容に依存する程度 (見捨てられ不安)」の次元と考えられ、依存性 (見捨てられ不安) が低いほど自己観はポジティブであり、依存性 (見捨てられ不安) が高いほど自己観はネガティブであるとされる。一方、他者観は「親密性の回避」の次元と考えられており、親密性を回避するほど他者観はネガティブに、親密性を回避しないほど他者観はポジティブになるとされている (永田・緒賀, 2010)。そして、この2次元から「見捨てられ不安」と「親密性の回避」がともに低い「安定型 (Secure: 人と親密であること、自立的であることのどちらも快適とするのが特徴で、最も安定したタイプ)」、 「見捨てられ不安」が低く「親密性の回避」が高い「拒絶型 (Dismissing: 人と親密になることに不快感を覚え、自立的であることを重んじるタイプ)」、 「見捨てられ不安」が高く「親密性の回避」が低い「とらわれ型 (Preoccupied: 他者と親密になることを好むが、他者に拒否されることへの不安が強いタイプ)」、 「見捨てられ不安」と「親密性の回避」がともに高い「恐れ型 (Fearful: 他者と親密さを求めているが、拒否されることが怖い結果的に他者と親しくなることを避けるタイプ)」という4類型に分類できるとされる。中尾・加藤 (2006) は、成人愛着スタイル研究がこの4類型を用いた概念化・測定方法に集約されつつあるとしている。

愛着スタイルと相談行動の関連性については、これまで検討されていないが、愛着スタイルと援助要請および悩み方の個人差を検討した永井 (2013a) によれば、困難を抱えても自身での問題解決を試み、どうしても解決が困難な場合に援助を要請する「援助要請自立型スタイル」の傾向は、「拒絶型」「恐れ型」よりも「安定型」で高く、問題が深刻ではなく、本来なら自分自身で取り組むことが可能でも、安易に援助を要請する「援助要請過剰型スタイル」の傾向は、「拒絶型」

「恐れ型」よりも「安定型」「とらわれ型」で高く、問題の程度にかかわらず一貫して援助を要請しない「援助要請回避型スタイル」の傾向は、「安定型」「とらわれ型」よりも「拒絶型」で高く、さらにそれらよりも「恐れ型」で高かった。このように、愛着スタイルごとに援助要請の仕方が異なる事実が明らかにされていることから、援助要請行動の一形態と考えられる相談行動にも、愛着スタイルごとに異なる特徴が見られると推測される。

青年期の自立

坂本 (2006) は、自立を「親からの心理的離乳とアイデンティティの確立という2つの発達課題を達成することで一人前の大人として社会参加すること」と定義している。一方、白井 (2006) は、自立は「自分なりに見通しをもって、人生を切り開いていくこと」と定義している。このように、自立の定義は複数存在するが、山田・宮下 (2007) は、これまでなされてきた自立に関する研究を整理し、自立が複数の概念から構成されていることや、それらに認知面・行動面・情緒面の要素が共通して含まれていること指摘している。

Bartholomew & Horowitz (1991) は、成人の愛着スタイルの4類型のうち「安定型」の人は他の愛着スタイルよりも自立的であるという仮定があることを指摘している。一方、鳥居・岡島・桂田 (2011) は、大学生の愛着スタイルと一人でいられる能力 (the capacity to be alone: 以下CBAと記す) との関連について検討し、「安定型」だけではなく「拒絶型」においてもCBAが高いことを示した。この結果を受け、村木・岡島・桂田 (2012) は、大石・松永 (2008) が作成した包括的概念として自立を捉える自立意識尺度を用い、愛着スタイルとの関連について検討した。その結果、「安定型」が他の類型に比べ自立的であることが示された。そして、自立に関して「自分のことが何でも一人でできる」側面だけではなく「適切な対人関係を築くことができる」側面を捉えることを強調し、これらの2つの側面に愛着スタイルが影響すると述べている。

先行研究において、自立と相談行動の関連を検討した研究は見られないが、村木ら (2012) において愛着スタイルと自立の関連が示されているこ

とから、自立は、愛着スタイルごとに相談行動に異なる影響を与える要因と考えられる。なお、本研究においても、村木ら(2012)と同様に、自立を「自分のことが何でも一人でできる」と「適切な人間関係を築くことができる」の両面から捉える。

友人との心理的距離

金子(1989)は、心理的距離を「自己がある他者との間で、どれほど強く心理的な面でのつながりを持っていると感じ、どれほど強く親密で理解し合った関係を持っていると感じているかの度合い」と定義し、心理的な近さと捉えている。

愛着スタイルと心理的距離の関連については、永田・緒賀(2010)が中学生における愛着スタイルと対人疎外感の関連について検討し、「見捨てられ不安」と「親密性の回避」のいずれかが高い愛着スタイル(「拒絶型」および「とらわれ型」)、また、「見捨てられ不安」と「親密性の回避」が共に高い愛着スタイル(「恐れ型」)は、「見捨てられ不安」と「親密性の回避」が共に低い愛着スタイル(「安定型」)よりも対人疎外感が強かったことと、心理的距離が遠い者の方が近い者よりも対人疎外感が強かったことを示した。大学生においては、中尾・加藤(2006)が、愛着スタイルと愛着行動パターンとの関連について検討し、「親密性の回避」が低いほど直接的愛着行動(安全欲求を直接的に表現する愛着行動)を行い、「見捨てられ不安」が高いほど間接的愛着行動(自他の適切な心理的距離の調整にとらわれるため、安全欲求を間接的に表現する愛着行動)を行うことを示した。

これらのことから、「見捨てられ不安」と「親密性の回避」が共に低い「安定型」は、適切な人間関係を築けており、「拒絶型」「とらわれ型」「恐れ型」に比べ友人との心理的距離を近く感じていると考えられる。

先行研究において、心理的距離と相談行動の関連を検討した研究は見られないが、永田・緒賀(2010)や中尾・加藤(2006)において、愛着スタイルと心理的距離の関連が推測されることから、心理的距離は、愛着スタイルによって相談行動に異なる影響を与える要因と考えられる。

相談行動の利益とコスト

援助要請行動の生起に影響する要因の1つとして、「利益とコスト」が挙げられる(永井・新井, 2008)。高野・宇留田(2002)は、援助要請の意思決定の段階において、援助要請の実行・回避それぞれには、ポジティブな結果である利益と、ネガティブな結果であるコストが存在し、これらを考えて援助要請行動の意思決定が行われるとしている。また、永井・新井(2008)は、利益・コストの視点は、援助要請における結果予期を多様な面から扱うことを可能にしていることから、利益・コストの視点から相談行動を研究することは意義のあることであると述べている。

永井・新井(2007)は、中学生を対象に友人に対する相談行動に関わる利益・コスト、問題の程度、学校満足度が相談行動に与える影響について検討し、相談行動の高さには、相談実行の利益と問題の程度の高さが影響していたこと、また、心理社会的問題の相談行動の高さには、相談回避によるコストの高さが、心理社会的問題の相談行動の低さには、相談回避の利益の高さが影響していたとし、中学生の友人への相談行動を規定する要因として、「相談行動に関する利益・コスト」の視点が重要であることを示した。本研究においても、大学生の相談行動意図を規定する要因として、「相談行動に関する利益・コスト」の視点は重要なものと考えられる。

仮説モデルの考案

これまでの議論から、「自立」および友人との「心理的距離」が、「相談に関する利益の認知」を経由して、または直接的に悩みの相談行動意図(以後、「心理社会的相談の行動意図」と記す)に影響を及ぼすと考えられる。

先述のように、「自立」の程度は愛着スタイルごとに、「心理社会的相談の行動意図」へ異なる影響を与えると予測される。具体的には、愛着スタイルの違いにより、「自立」が「心理社会的相談の行動意図」に直接影響を与えるルートと、「相談に関する利益の認知」を経由して「心理社会的相談の行動意図」に影響を与えるルートがあると考えられる。

つぎに、友人との「心理的距離」は、友人との関係性を示すものである。友人と親密であるか否

かは、愛着スタイルの違いにより相談行動に直接影響を与える場合もあれば、相談することで自身に利益があるかを考えてから相談に至る場合もあると考えられる。したがって、「自立」と同様、「心理社会的相談の行動意図」に直接影響を与えるルートと、「相談に関する利益の認知」を経由して「心理社会的相談の行動意図」に影響を与えるルートがあると考えられる。

さらに、永井・新井(2007)において、「相談に関する利益・コスト」が相談行動に影響を与える結果が示されていることから、「相談に関する利益の認知」は「心理社会的相談の行動意図」に影響を与えると考えられる。

以上の議論から、Figure 1の仮説モデルを考案したが、愛着スタイルのタイプにより、モデル中で経由するルートは異なると考えられる。まず、「相談に関する利益の認知」を経由するタイプについて考えていく。

「安定型」は見捨てられ不安と親密性の回避がともに低いタイプである。永井(2013a)によると、「安定型」は、援助要請自立型スタイルの得点が高く、悩みを抱えた時すぐに相談せず、自身での解決を試みるが、どうしても解決できない場合には友人に相談をすることを考える。「安定型」の人は、相談することで悩みを解決できると考えたときに相談すると推測されることから、相談による利益やコストを考慮していると考えられる。したがって、「安定型」において「相談に関する利益の認知」から「心理社会的相談の行動意図」へ至るパスがみられると予測される。また、「安定型」と逆の傾向を示すのが、見捨てられ不安と親密性の回避がともに高い「恐れ型」である。永井(2013a)によると、「恐れ型」は援助要請回避型スタイルの得点が高かった。その一

方で、悩みを持ちやすいタイプ(永井, 2013a)であるとされている。悩みを持ちやすいが、相談を回避しやすい「恐れ型」は、友人関係への不安が強いため、相談すると相手に馬鹿にされるかもしれない、相談内容をばらされるかもしれないという懸念があると考えられ、相談することの利益とコストを考慮していると推測される。したがって、「恐れ型」においても「相談に関する利益の認知」から「心理社会的相談の行動意図」へ至るルートが見られると予測される。

愛着スタイルの4タイプの中で、見捨てられ不安が低いタイプは「安定型」と「拒絶型」である。これらのタイプは友人関係への不安が低いために、相談することで相手にどう思われるかという評価懸念が低いと考えられる。そして、見捨てられ不安が低い者の中でも自立している者は、より「自分は自分」という意識が強く、相手からの評価懸念を持ちにくいと考えられるため、悩みを抱えたときには相手に相談しやすいと考えられる。したがって、「安定型」と「拒絶型」は、「自立」から直接「心理社会的相談の行動意図」へ至るルートが存在すると予測できる。

「心理的距離」に関しては、愛着スタイルの4タイプの中で、「親密性の回避」が低いタイプは「安定型」と「とらわれ型」である。これらのタイプは、友人とより親密になりたい意識を持っていることから、悩みを抱えたときにも自ら相談しやすいと考えられる。そして、もともと悩みを相談しやすいと考えられる彼らにとって、心理的距離の近さを感じる事が相談をよりしやすくすると考えられる。したがって、「安定型」と「とらわれ型」には、「心理的距離」から「心理社会的相談の行動意図」へ至る直接ルートが存在すると予測できる。

本研究では、愛着スタイルごとに大学生の友人への相談行動を規定する要因を明らかにすることを目的とする。具体的には「心理社会的相談の行動意図」に影響を与えると予測される「自立」「心理的距離」「相談行動に関する利益認知」に関して、仮説モデルを想定し、「心理社会的相談の行動意図」に至るまでの経路を検討する。

愛着スタイルごとに、モデルに想定されるパスについての仮説は以下のとおりである。

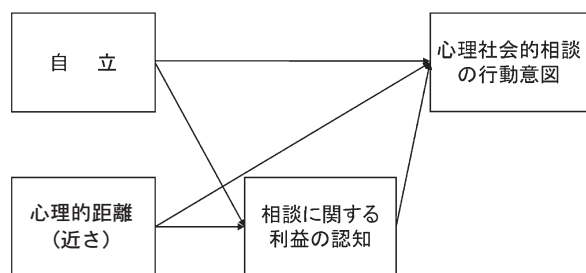


Figure 1 本研究の仮説モデル

- 仮説1：「安定型」愛着スタイルと「恐れ型」愛着スタイルには、「相談に関する利益の認知」を経由し、「心理社会的相談の行動意図」に至るルートがみられるであろう。
- 仮説2：見捨てられ不安が低い「安定型」愛着スタイルと「拒絶型」愛着スタイルには、「自立」から「心理社会的相談の行動意図」への直接のパスがみられるであろう。
- 仮説3：親密性の回避が低い「安定型」愛着スタイルと「とらわれ型」愛着スタイルには、「心理的距離」から「心理社会的相談の行動意図」への直接のパスがみられるであろう。

方 法

調査対象者 首都圏の3大学に在籍する大学生329名に質問紙を配布し、286名の質問紙を回収した(質問紙回収率86.9%)。回収した質問紙のうち、無回答の6名と回答に欠損値のある40名を分析の対象から除外し、最終的に240名(男性63名・女性177名、平均年齢19.5歳、 $SD = 1.20$)を分析対象とした(有効回答率72.9%)。

調査時期と方法 2015年4月から6月に質問紙調査を授業時間内に集団実施した。

調査項目 ①フェイスシートでは、調査協力の可否を尋ね、協力可能な場合に年齢・学年・性別と以降の回答を求めた。②愛着スタイルの測定には、ECR-GO(4分類愛着スタイル尺度：Brennan, Clark, & Shaver, 1998；中尾・加藤, 2004)を用いた。回答者の一般他者に対する愛着スタイルを、“見捨てられ不安”と“親密性の回避”の2次元から把握する項目である。中尾・加藤(2004)が作成した全30項目のうち、中尾・加藤(2004)で行

われた因子分析において因子負荷量の高い14項目を使用した。「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の7件法で回答を求めた。③自立の測定には、自立尺度(村木ら, 2012)のうち、因子負荷量の低い2項目を除く16項目を使用した。「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の5件法で回答を求めた。④相談行動に関する利益・コストの認知の測定には、相談行動の利益・コスト尺度改訂版(永井・新井, 2008)のうち、因子負荷量の低い4項目と質問内容が重複する9項目を除く13項目を使用した。最も親しい友人に悩みを相談するときの利益・コストに関して「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の5件法で回答を求めた。⑤心理的距離の測定には、心理的距離尺度(金子, 1989)のうち、因子負荷量の低い3項目を除く7項目を使用した。最も親しい友人を想定し、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の5件法で回答を求めた。⑥相談行動意図の測定には、相談行動尺度(永井・新井, 2005)のうち、因子負荷量の低い9項目を除く11項目を使用した。最も親しい友人に「相談すると思う」から「相談しないと思う」の5件法で回答を求めた。

質問紙の構成 カウンターバランスをとるため、質問の順番を入れ替えた2種類の質問紙を作成した。

倫理的配慮 調査は無記名で実施し、回答済み質問紙の管理を徹底するなど、個人情報保護に最大限の配慮をすることおよび調査への参加は強制ではないことを質問紙表紙に明記した。「調査に協力する」という項目へのチェック、および質問紙への回答をもって、調査協力の了解を得たものとみなした。なお、昭和女子大学倫理委員会心理学系倫理問題部会による承認を得た(承認番号2015-1号)。

Table 1 質問紙の構成

-
1. フェイスシート(調査協力の可否)、年齢、性別
 2. 4分類愛着スタイル尺度(ECR-GO：Brennan et al., 1998；中尾・加藤, 2004)
 3. 自立尺度(村木・岡島・桂田, 2012)
 4. 心理的距離尺度(金子, 1989)
 5. 相談行動の利益・コスト尺度改訂版(永井・新井, 2008)
 6. 相談行動尺度(永井・新井, 2005)
-

分析方法 本研究の分析にはIBM SPSS Statistics 22.0およびAmos 22.0を用いた。

結果

(1) 使用した尺度の信頼性と得点化

①愛着スタイル尺度 (ECR-GO)：因子分析 (最尤法・プロマックス回転) の結果、先行研究同様に「見捨てられ不安」($\alpha = .87$) と「親密性の回避」($\alpha = .70$) の2因子構造を確認でき、信頼性も充分であった。さらに、「見捨てられ不安」「親密性の回避」の各尺度得点のメディアン値により上位群と下位群に分け、どちらも低い「安定型」、「見捨てられ不安」が低く「親密性の回避」が高い「拒絶型」、「見捨てられ不安」が高く「親密性の回避」が低い「とらわれ型」、どちらも高い「恐れ型」に分類した。

②自立尺度： α 係数は.80で、信頼性は充分であった。合計得点を「自立」の得点とした。

③相談行動の利益・コスト尺度改訂版： α 係数は.77で、信頼性は充分であった。合計得点を「相談に関する利益の認知」の得点とした。

④心理的距離尺度： α 係数は.82で、信頼性は充分であった。合計得点を「心理的距離」の得点とした。

⑤相談行動尺度：因子分析 (最尤法・プロマックス回転) の結果、先行研究同様に「心理社会的相談の行動意図」($\alpha = .87$) と「学習に関する相談の行動意図」($\alpha = .83$) の2因子構造を確認でき、信頼性も充分であった。本研究においては、「心理社会的相談の行動意図」の合計得点のみを用いた。

なお、使用した各尺度の基本統計量は、Table 2のとおりである。

(2) 心理社会的相談の行動意図に影響を及ぼす要因に関する分析

愛着スタイルごとに、使用した尺度間の相関係数を算出したところ、愛着スタイルにより、関連する尺度に違いがみられた (Table 3, Table 4)。「自立」と「心理社会的相談の行動意図」の間には、「拒絶型」にのみ有意な正の相関が認められた。また、「心理的距離」と「相談に関する利益の認知」の間および「相談に関する利益の認知」

Table 2 各尺度の基本統計量

愛着スタイル	自立			心理的距離 (近さ)			相談に関する利益の認知			心理社会的相談の行動意図		
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
安定型	54	3.6	.38	54	4.4	.56	54	3.7	.53	54	3.4	1.01
拒絶型	65	3.4	.53	65	4.1	.67	65	3.3	.53	65	2.9	.92
とらわれ型	51	3.4	.54	51	4.3	.50	51	3.8	.40	51	3.7	.87
恐れ型	70	3.3	.50	70	4.0	.63	70	3.3	.49	70	2.9	.88
全体	240	3.4	.51	240	4.2	.62	240	3.5	.55	240	3.2	.97

*M*は項目平均値で、1点から5点の範囲に分布する。

Table 3 尺度間相関の結果 1

	自立	心理的距離 (近さ)	相談に関する利益の認知	心理社会的相談の行動意図
自立		.19	.13	.13
心理的距離 (近さ)	.10		.40**	.18
相談に関する利益の認知	.19	.46***		.61***
心理社会的相談の行動意図	.28*	.37**	.38**	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, 表中の数値は、相関係数 (r)

斜線より上：「安定型」愛着スタイルの結果 ($n = 54$)、斜線より下：「拒絶型」愛着スタイルの結果 ($n = 65$)

Table 4 尺度間相関の結果2

	自立	心理的距離(近さ)	相談に関する利益の認知	心理社会的相談の行動意図
自立		.22	.00	.19
心理的距離(近さ)	.00		.22	.50***
相談に関する利益の認知	-.15	.30*		.07
心理社会的相談の行動意図	.18	.31*	.44***	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, 表中の数値は、相関係数(r)
 斜線より上:「とらわれ型」愛着スタイルの結果($n = 51$)、斜線より下:「恐れ型」愛着スタイルの結果($n = 70$)

と「心理社会的相談の行動意図」の間には、「とらわれ型」にのみ有意な正の相関が認められなかった。さらに、「心理的距離」と「心理社会的相談の行動意図」の間には、「安定型」にのみ有意な正の相関が認められなかった。

つぎに、仮説モデル(Figure 1)について、共分散構造分析によるパス解析を行った。全データを用いた場合には、データとモデルの適合度は低かったが($\chi^2(1) = 7.12, p < .01, GFI = .99, AGFI = .86, CFI = .95, RMSEA = .16$)、愛着スタイルの4類型による多母集団同時分析(最尤推定法)を行ったところ、データとモデルの適合度は高かった($\chi^2(4) = 5.11, n.s., GFI = .99, AGFI = .90, CFI = .99, RMSEA = .03$)。以下、多母集団同時分析の結果を愛着スタイルごとに分けて見ていく(Figure 2~Figure 5)。

①安定型愛着スタイル

「安定型」(Figure 2)では、「心理的距離」から「相談に関する利益の認知」へのパスが有意であった($\beta = .39, p < .01$)。また、「相談に関する利益の認知」から「心理社会的相談の行動意図」へ

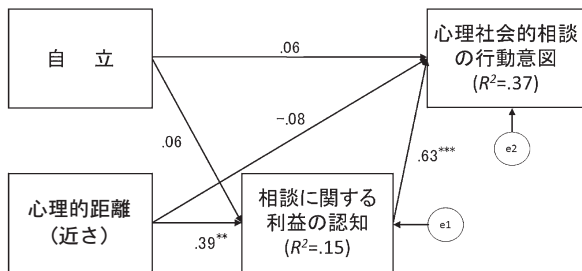


Figure 2 安定型愛着スタイルのパスの解析結果

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$
 安定型(見捨てられ不安:低、親密性の回避:低、 $n = 54$)

のパスも有意であった($\beta = .63, p < .001$)。

②拒絶型愛着スタイル

「拒絶型」(Figure 3)では、「自立」から「心理社会的相談の行動意図」へ有意傾向のパスがみられた($\beta = .21, p < .10$)。また、「心理的距離」からは「相談に関する利益の認知」へ有意なパス($\beta = .45, p < .001$)がみられ、「相談に関する利益の認知」から「心理社会的相談の行動意図」へも有意傾向のパスがみられた($\beta = .23, p < .10$)。さらに、「心理的距離」からは「心理社会的相談の行動意図」への直接のパスも有意であった($\beta = .25, p < .05$)。

③とらわれ型愛着スタイル

「とらわれ型」(Figure 4)では、「心理的距離」から「心理社会的相談の行動意図」への直接のパスが有意であった($\beta = .49, p < .001$)。また、「心理的距離」からは、「相談に関する利益の認知」への有意傾向のパスもみられた($\beta = .23, p < .10$)。しかし、「相談に関する利益の認知」から「心理社会的相談の行動意図」へのパスは有意ではなかった。

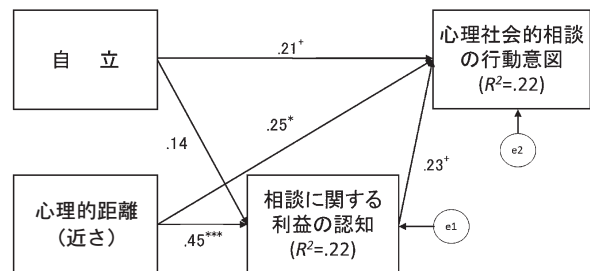


Figure 3 拒絶型愛着スタイルのパスの解析結果

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$
 拒否型(見捨てられ不安:低、親密性の回避:高、 $n = 65$)

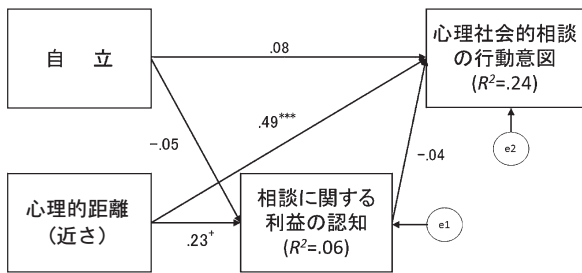


Figure 4 とらわれ型愛着スタイルのパスの解析結果

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$
 とらわれ型(見捨てられ不安:高、親密性の回避:低、 $n = 51$)

④恐れ型愛着スタイル

「恐れ型」(Figure 5)では、「自立」から「心理社会的相談の行動意図」へのパスが有意であった($\beta = .24, p < .05$)。また、「心理的距離」から「相談に関する利益の認知」へのパスも有意であり($\beta = .30, p < .001$)、「相談に関する利益の認知」から「心理社会的相談の行動意図」へのパスも有意であった($\beta = .42, p < .001$)。さらに、「心理的距離」から「心理社会的相談の行動意図」への有意傾向のパス($\beta = .18, p < .10$)もみられた。

⑤類型間のパスの比較

「安定型」と「恐れ型」のいずれにも「相談に関する利益の認知」から「心理社会的相談の行動意図」への有意なパスと「心理的距離」から「相談による利益の認知」への有意なパスがみられたため、パラメータ間の差に対する検定統計量を算出したところ、「安定型」と「恐れ型」のパスの間に有意な影響力の差はみられなかった(それぞれ $1.54, n.s.$, $.84, n.s.$)。また、「拒絶型」と「とらわれ型」のいずれにも「心理的距離」から「心理

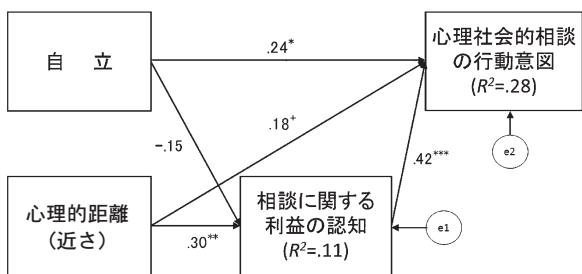


Figure 5 恐れ型愛着スタイルのパスの解析結果

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$
 恐れ型(見捨てられ不安:高、親密性の回避:高、 $n = 70$)

社会的相談の行動意図」への有意なパスがみられたため、パラメータ間の差に対する検定統計量を算出したところ、「拒絶型」と「とらわれ型」のパス間に有意な影響力の差はみられなかった($1.83, n.s.$)。

考察

仮説1は、「安定型」愛着スタイルと「恐れ型」愛着スタイルには、「相談に関する利益の認知」を経由し、「心理社会的相談の行動意図」に至るルートがみられるであろうであった。「安定型」愛着スタイルと「恐れ型」愛着スタイルのいずれにおいても、「相談に関する利益の認知」を経由し、「心理社会的相談の行動意図」に至るルートがみられたため、仮説1は支持された。また、仮説2は、「見捨てられ不安が低い「安定型」愛着スタイルと「拒絶型」愛着スタイルには、「自立」から「心理社会的相談の行動意図」への直接のパスがみられるであろうであった。「拒絶型」愛着スタイルには「自立」から「心理社会的相談の行動意図」へ有意傾向の直接のパスがみられたが、「安定型」愛着スタイルには有意なパスがみられず、仮説2は完全には支持されなかった。さらに、仮説3は、「親密性の回避が低い「安定型」愛着スタイルと「とらわれ型」愛着スタイルには、「心理的距離」から「心理社会的相談の行動意図」への直接のパスがみられるであろうであった。「とらわれ型」愛着スタイルには「心理的距離」から「心理社会的相談の行動意図」への直接のパスがみられたが、「安定型」愛着スタイルには有意なパスがみられず、仮説は完全には支持されなかった。ここからは、愛着スタイルごとに仮説との対応を考察する。

①安定型愛着スタイル

「安定型」の愛着スタイルは、見捨てられ不安・親密性の回避がともに低い類型である。「安定型」の特徴としてCollins, Guichard, Ford, & Feeney (2004)は、他者からの受容を確信し、自己は愛情を受ける価値のある人間であると捉えている。また、Pietromonaco, Greenwood & Barrett (2004)は、他者を信頼し、率直なコミュニケーションによって他者と親密な関係を構築しようとすると述べている。さらに、永田・緒賀 (2010)

は、Collins et al. (2004) およびPietromonaco et al. (2004) に加えて、真の自分を隠すことなく他者と親密な関係を築くことができることはもちろん、一人で行動する場面においても、自尊感情を自分自身で維持できるため、他者との関係における違和感は小さいだろうと述べている。

これらの特徴から、「安定型」は友人関係への不安や相手からの評価懸念が少なく、他者と親密な関係を築くことができる類型と考えられる。ただし、相手との心理的距離が近い場合にすぐに相談するのではなく、心理的距離が近いほど相談することへの利益を高く認知しやすくなり、相談することへの利益を高く認知するほど友人に悩みを相談する行動意図が高くなるといえる。

永井 (2013a) では、「安定型」は援助要請自立型得点が高く、悩みの経験が低い結果を示していることから、適切な人間関係を築けているため、心理社会的な悩みを持つこと自体が少ないと推測される。そして、永井 (2013b) では、援助要請自立型を「困難を抱えても自身での問題解決を試み、どうしても解決が困難な場合に援助を要請する」としていることから、安定型は悩みを抱えたとき、その悩みを解決することを重視し、まず自分の力で解決しようと試みるため、悩みをすぐに相談するという考えを持ちにくいと推測できる。そのため、「自立」や「心理的距離」が直接的に「心理社会的相談の行動意図」に影響しなかったと考えられる。

②拒絶型愛着スタイル

「拒絶型」愛着スタイルは、見捨てられ不安が低く、親密性の回避が高い類型である。永田・緒賀 (2010) は、「拒絶型」について、自分に自信があり他者との親密な関係の重要性を過小評価し、独立性と自立性を重視していると捉えており、他者との間に距離が生じたとしても、その出来事をネガティブに捉えることは少ないだろうと述べている。また、村木ら (2012) も、「拒絶型」の人は、CBA (一人でいられる能力) は持っているが、他者との良好な関係を築くことができるような自立した状態には達していないのではないかと述べている。

「拒絶型」では、「心理的距離」から「相談に関する利益の認知」への有意なパスと、「相談に関する利益の認知」から「心理社会的相談の行動意

図」への有意傾向のパスが認められた。このことから、「拒絶型」の人は、友人との心理的な距離の近さを感じたとき、悩みを相談することで自身に利益があると認知し、心理社会的相談に至るルートがあることが示された。また、「心理的距離」から「心理社会的相談の行動意図」への有意なパスもみられた。このことから、「拒絶型」の人は心理的な距離の近さを感じたときに相談することの利益やコストを考えて相談しようとするルートと、相談に関わる利益を考慮することなく、心理社会的な相談をしようとする意図を持つルートの両方が存在することが明らかになった。

永井 (2013a) では、愛着スタイルと援助要請および悩み方の個人差の関連を検討した結果、「拒絶型」は援助要請回避型得点が高く、ソーシャルサポート得点が低いことを示していることから、親密な関係を回避している「拒絶型」の人が心理的な距離の近さを感じることでできる友人は、少人数であると推測される。そして、「拒絶型」の人は、友人から見捨てられる不安が低いと、悩みを相談することで相手にどう思われるかを気にしにくいと考えられ、心理的な距離が近い友人には悩みを相談する意図を持ちやすいと考えられるが、相談に関する利益を高く認知することで心理社会的な相談行動意図に至るルートもあることから、相談に関する利益を認知しないと相談しない場合もあることが明らかになった。

また、仮説のとおり「自立」から直接「心理社会的相談の行動意図」に至る有意傾向のパスもみられ、自立しているほど友人に心理社会的な悩みを相談しようとする意図を持つ傾向が示された。「拒絶型」における自立の重要性が窺われ、「拒絶型」の人に対しては、自立を高めるようなアプローチを行うことで、心理社会的な相談行動の意図が増加すると考えられるが、友人を増やしたり、友人との心理的距離を近づけたりするアプローチもさらに重要と考えられる。

③とらわれ型愛着スタイル

「とらわれ型」愛着スタイルは、見捨てられ不安が高く、親密性の回避が低い類型である。「心理的距離」から直接「心理社会的相談の行動意図」へ至る有意なパスと「相談に関する利益の認知」への有意傾向のパスがみられた。この結果から、「とらわれ型」は、心理的な距離の近さを感じ

じたときに、相談に関する利益やコストを考えるよりも心理社会的な相談を意図することが示された。永田・緒賀(2010)によれば、「とらわれ型」は、他者との関係に過剰にのめり込むとともに、その関係を理想化し、自分の幸福感を他者の受容に依存すると捉え、自身の抱く希望が叶い、他者との関係がより親密になった状態では、他者との関係に距離感を感じながらも、本当の自分を理解されないと感じることは少ないだろうとされている。しかし、自己の抱く理想が叶わず、他者との関係に距離が生じた状態になった場合、これまで抱いてきた希望に満ちた他者に対する認知が全てネガティブに変化することも示唆されている。

友人に悩みを相談した場合に、他者にばらされるかもしれない、馬鹿にされるかもしれないという不安を抱いている可能性がある。そのため相談に関する利益・コストを考慮すると考えられるが、それが心理社会的な相談の行動意図には繋がらずに、心理的距離が近い友人への相談の行動意図が高まると考えられる。

さらに、「とらわれ型」の人が感じている心理的な距離の近さと、相手を感じている距離の近さは異なる可能性が考えられる。「とらわれ型」の人は相手よりも心理的な距離を近く感じている可能性があり、相手は悩みを話されることを快く思っていない可能性がある。永井(2013a)が、「とらわれ型」は援助要請過剰型スタイル得点が高く、適切な距離を取ることが難しいという結果を示していることから、「とらわれ型」が相談相手である友人よりもお互いの距離を近く感じ、必要以上に悩みを相談しようする可能性が高いと考えられる。「とらわれ型」の人が心理的な距離の近さを感じた場合にすぐに悩みを相談する意図を持つことは、相談される友人の立場からは否定的にみられると推察されるため、相談する前に、自分で解決できるか否か、相手の気持ち、相談に関する利益やコストを考えてみるよう促すことで過剰な相談を防ぐことができると考えられる。

④恐れ型愛着スタイル

「恐れ型」愛着スタイルは、見捨てられ不安が高く、親密性の回避が高い類型である。「安定型」愛着スタイルと同様に「心理的距離」から「相談に関する利益の認知」を経由し、「心理社会的相談の行動意図」へ至る有意なパスがみられた。見

捨てられ不安と親密性の回避がともに高い類型であり、安定型とは正反対の特徴を持っている。永田・緒賀(2010)は、「恐れ型」の特徴に関して、他者に拒絶されるという予測に結びついた強い対人不信を経験していると考えられ、この経験は他者を受け入れてくれない拒否的な存在であるという確信につながると述べている。また、自尊感情を外的な受容に依存し、自己に価値を与えうる他者からの受容も確信できていない状態にあると考えられるため、自己の意思に沿った積極的なコミュニケーションが行えず、他者との間に大きな距離感を感じているとされる。このような特徴のため、恐れ型は友人に見捨てられる不安や友人からの評価を気にし、親密になりたいと思いつつも距離を取ってしまうと考えられる。悩みを相談する際も、相談することで相手からどう思われるか、他者にばらされるのではないかと、馬鹿にされるのではないかと不安を感じていると推測される。このことから、「恐れ型」の人は、対人関係における不安の強さから、相談することで自身が得られる利益を高く認知した場合に悩みの相談行動意図が高くなると考えられる。また、「恐れ型」には「拒絶型」と同様に「自立」から直接「心理社会的相談の行動意図」に至る有意なパスがみられた。このことから、自立しているほど友人に心理社会的な悩みを相談する意図を持つことが示された。「恐れ型」の人は、友人との親密な関係を回避しているため、友人と一緒に行動することを避け、日常的に一人であることが多いと考えられるが、見捨てられ不安が高いため一人でいることに抵抗感があると考えられる。自立しているほど、一人で行動することへの抵抗感が少ないため、友人からの評価を過剰に気にすることなく、悩みを相談する意図を持つことができると推測される。また、本研究の自立には「適切な人間関係を築き、適応できる」という側面も含まれている。したがって、「恐れ型」の人に対しては自立を促すアプローチを行うことが必要と考えられる。

さらに、「心理的距離」から「心理社会的相談の行動意図」に至る有意傾向のパスも認められた。「恐れ型」の人は、心理的な距離を近く感じた場合に、相談に関する利益やコストを考慮せず、すぐに心理社会的な相談をする意図を持つ場

合もあることも示されたが、その関連は弱く、根底には他の人に悩みをばらされるかもしれない、馬鹿にされるかもしれないという不安があることから、話したくないという回避的な気持ちがあると考えられる。

総合考察

大学生を対象として心理社会的相談行動意図に影響を及ぼす要因について、愛着スタイルごとに検証してきた結果、心理社会的相談の行動意図に至るプロセスには愛着スタイルによる違いがあることが示された。「見捨てられ不安」の高さと「親密性の回避」の高さによる組み合わせが正反対の類型である「安定型」の愛着スタイルと「恐れ型」の愛着スタイルには、「心理的距離」から「相談に関する利益の認知」を経由して「心理社会的相談の行動意図」へ至るルートがみられ、同様に正反対の類型である「拒絶型」の愛着スタイルと「とらわれ型」の愛着スタイルには「心理的距離」から直接「心理社会的相談の行動意図」へ至るルートがみられることが明らかになった。ただし、類型間に共通のルートが存在しても、ルートの存在理由は愛着スタイルにより異なると解釈できた。また、自立を促したり、友人との心理的距離を近づける働きかけをするなど、相談行動を促進させるために有効なアプローチも、愛着スタイルにより異なると解釈できた。

今後の課題

本研究では各要因が心理社会的相談の行動意図に及ぼす影響を検討しているが、実際の行動経験については検討していない。行動意図と行動の間には差異の存在が予測されることから、今後は行動経験について検討する必要があると考えられる。また、NHK放送文化研究所(2013)の調査で、1992年以降悩みごとの相談相手としての「友人」の割合が減少傾向にある一方で「お母さん」の割合が増加していることから、家族や教師など、友人以外への相談行動についても検討する必要があると考えられる。さらに、戸田(1991)は、青年期にはメタ認知の高まりや家族以外の重要な他者という「新しい愛着対象の登場」により、自分や

他者との関係性を客観視することができるようになるため、IWMが大きく変更される可能性がある」と述べており、内田(2014)も児童期から青年期にほぼ5割の者の愛着スタイルが変化していると述べていることから、大学生の愛着スタイルも固定的なものではないと推測される。したがって、大学生に対して相談行動を促進させるためのアプローチを行う際には、特定の愛着スタイルを持っていると固定的に見続けることなく、愛着スタイルの変化を視野に入れながら実施していく必要があると考えられる。

引用文献

- 相川 充 (1989). 援助行動 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編) 社会心理学パースペクティブ1 個人から他者へ (pp.291-310) 誠信書房
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss Vol.1 Attachment*. New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult romantic attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp.46-76). New York: Guilford Press.
- Collins, N. L., Guichard, A. C., Ford, M. B., & Feeney, B. C. (2004). Working models of attachment: New developments and emerging themes. In W. S. Rholes & J. A. Simpson (Eds.), *Adult Attachment: Theory, Research, and Clinical Implications* (pp.196-239). New York: Guilford Press.
- 金子俊子 (1989). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 粕谷貴志・菅原正和 (2001). 中学生の内的作業モデルと学校適応との関連 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 11, 137-145.

- 河村壮一郎 (2004). 精神健康調査票を用いた短期大学生の精神的健康に関わる要因の検討 鳥取短期大学研究紀要, 50, 17-25.
- 牧野幸志 (2014). 大学生の相談行動に関する研究 (3) —入学半年後の大学生の悩みと実際の相談行動—日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 917.
- 水田一郎・小林哲郎・石谷真一・安住伸子・井出草平・谷口由利子 (2009). 大学生に見出されるひきこもりの精神医学的な実態把握と援助に関する研究 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業—思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究 平成20年度総括・分担研究報告書
- 水田一郎・小林哲郎・石谷真一・安住伸子・井出草平・谷口由利子 (2010). 大学生に見出される不登校・ひきこもりの実態把握と支援に関する研究 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業—思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究 平成19~21年度総合研究報告書
- 文部科学省 (2015). 学校基本調査 (速報値) の公表について Received from http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1360721.htm (2015年8月6日)
- 宮下敏恵・森崎竜亮 (2004). 怒り感情の表出制御と精神的健康及び対人不安との関係 上越教育大学研究紀要, 23, 488-499.
- 村木佑実子・岡島泰三・桂田恵美子 (2012). 青年期の愛着スタイルと自立との関連 臨床教育心理学研究, 38, 33-38.
- 永井 智・新井邦二郎 (2005). 中学生友人に対する相談行動尺度の作成 筑波大学心理学研究, 30, 73-80.
- 永井 智・新井邦二郎 (2007). 利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に与える影響の検討 教育心理学研究, 55, 197-207.
- 永井 智・新井邦二郎 (2008). 相談行動の利益・コスト尺度改訂版の作成 筑波大学心理学研究, 35, 49-55.
- 永井 智 (2013a). 愛着スタイルに基づいた援助要請および悩み方の個人差の検討, 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 466.
- 永井 智 (2013b). 援助要請スタイル尺度の作成—縦断調査による実際の援助要請行動との関連から—教育心理学研究, 61, 44-55.
- 永田有香・緒賀郷志 (2010). 中学生における愛着スタイルと対人疎外感の関連 岐阜大学教育学部研究報告, 59, 159-168.
- 内閣府 (2010). 若者の意識に関する調査 (ひきこもりに関する実態調査) 報告書 内閣府政策統括官共生社会政策担当
- 内閣府 (2014). 平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査報告書
- 中溝比呂志・板橋幸彦・芳賀明子・足立 透・飯野由美・田中 忍・松木啓展・吉田 弘 (2000). 高校生の相談に関する意識についての研究V —高校生の悩みと相談相手との関連— 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 96.
- 中尾・加藤 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 中尾・加藤 (2006). 成人愛着スタイルは成人の愛着行動パターンの違いを本当に反映しているのか? パーソナリティ研究, 14, 281-292.
- NHK放送文化研究所 (2013). NHK中学生・高校生の生活と意識調査2012 NHK出版
- 丹羽智美 (2002). 青年期における親への愛着が友人関係に及ぼす影響—環境移行期に着目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 49, 135-143.
- 野崎秀正・石井眞治 (2004). 抑制要因に基づく大学生の援助要請行動の分類 広島大学大学院教育学研究科紀要, 53, 49-54.
- 大石美佳・松永しのぶ (2008). 大学生の自立の構造と実態—自立尺度の作成— 日本家政学会誌, 59, 461-469.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- Pietromonaco, P. R., Greenwood, D., & Barrett, L. F. (2004). Conflict in adult close relationships: An attachment perspective. In W. S. Rholes &

- J. A. Simpson (Eds.), *Adult attachment: New directions and emerging issues* (pp.267-299). New York: Guilford Press.
- 坂本公男 (2006). 青年期の心の発達と自立の課題 高知県教育公務員長期研修生研究報告
- 白井利明 (2006). 青年期はいつか 白井利明(編) よくわかる青年心理学 ミネルヴァ書房
- 高野 明・宇留田麗 (2002). 援助要請行動から見たサービスとしての学生相談 教育心理学研究, 50, 113-125.
- 戸田弘二 (1991). Internal Working Models研究の展望 北海道大学教育学部紀要, 55, 133-143.
- 鳥居瑤子・岡島泰三・桂田恵美子 (2011). 大学生の一人でいられる能力と愛着スタイルとの関連—「一人行動に対する不安耐性」尺度の作成— 臨床教育心理学研究, 37, 33-39.
- 内田利広 (2014). 内的作業モデルの児童期から青年期における変容—重要な他者という観点

- から— 京都教育大学紀要, 125, 117-130.
- 渡部雪子・永井 智・桑原千明 (2014). 大学生における援助要請の方法と適応との関連の検討 立正大学心理学研究年報, 5, 47-53.
- 山田裕子・宮下一博 (2007). 青年の自立と適応に関する研究 —これまでの流れと今後の展望— 千葉大学教育学部研究紀要, 55, 7-12.

謝 辞

本研究にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

注

本論文は、平成27年度昭和女子大学大学院生活機構研究科心理学専攻修士論文を再分析し、新たにまとめなおしたものである。

すずき ななこ (足立区こども支援センターげんき)
しみず ゆたか (昭和女子大学大学院生活機構研究科)